

昔我何ぞ大物の中に出まきや且又父の面を
きそくもなき者と討死せしに情なきは是も道に來り
たしとては傳家上と謂ふなり以て色に身を著るは是立
能き事なり今四五日間如何にもお交へ合戦の落
着きを見届せん又能き方便も有るし軍にきのふ一日一夜の事
されは色に限るを庄内の中にも落し味方幾人か有る
し中山親王も生死を知らず色に大山はるかに隔よりわれ
ハあふ又打て出て我光公より此に倅しと救護其一味の者
お民百姓なりと云ふ出来ざるなりあふりあふるは口を食り
もは道に引返し敗軍の味方を倅し一戦して見よと思

ふりかゝるなりお昌成も美を馳走しとも岸に舟を着け
させ舟に舟を馳走し味方を倅し中々はかふなり倅にて
是と仰せ上我の如き者ありとも而仲間下は成も召
連れられし程有仕合に合し申され成政大に悦み汝ら
中にお感當に堪ふり去るなりあるはあれを我に及んも
とて返されし程有仕合に合し申され成政大に悦み汝ら
ハ森陰より一むに此はあり奥に社檀あり成政もあつた鳥
権現也汝ら世玉をいそ拝礼して志はよく休む社僧
入来りたるは是し何ものかをいふ平田の御砂越村
飛鳥権現ありと云ふは成政再拝しては色に名ある